

龍馬と軍鶏（しゃも）鍋

慶応3年（1867年）11月15日、京都の近江屋という醤油商の2階で、坂本龍馬は、中岡慎太郎と火鉢を抱え込んで話しにふけていました。1ヶ月前の10月14日、龍馬の奔走で、徳川慶喜に大政奉還させたばかりでした。二人は、これからの日本の政治や経済の仕組みを話し合っていたのですが、そこへ、十津川郷士と名乗る7人の男が訪ねてきました。そのうち3人が二階に駆け上がり、二人を斬殺しました。有名な、龍馬暗殺の近江屋事件です。

龍馬は、その日、風邪を引き、熱もあって、寒気がひどかったようです。そこへ中岡が訪ねてきたので、龍馬は、店の者に、「しゃもを買って来い」と命じ、鳥屋に買いに行かせた、と司馬遼太郎は、「龍馬が行く」の中で書いています。しゃも鍋でも食べて暖まろうということだったのでしょう。

しゃも鍋は、結構、日本には古くからあったようです。しゃも自体は、江戸時代のはじめ、タイから輸入されのだそうです。このためタイの古い国名シャムから、“しゃも”となったと言われているようです。関東には300年以上ものしゃも鍋の暖簾を誇るお店もあるそうです。牛肉のすきやきが始まったのは幕末、西欧人が日本に頻繁に来るようになってからですから、その歴史は140年ほど。多分、醤油、砂糖、お酒で味付け、ねぎや玉葱と一緒に煮込むしゃも鍋は、牛すきやきの原点なのでしょう。

高知は土佐犬による闘犬で有名ですが、中芸地域を中心として闘鶏もまた盛んであり、しゃもの飼育も行われて来たようです。ですから、しゃも鍋は、土佐生まれの龍馬の好物だったのかもかもしれません。

高知の他にも、青森、秋田などでは金八鶏と呼ばれて、幕末ごろから飼育されて来たそうです。また、東京では昭和46年ごろから本格的に飼育され始め、食用として改良され、東京しゃもとして人気があるようです。余談ですが、その東京には、実は、「闘犬、闘鶏、闘牛等取締条例」という、「犬や鶏、牛などを互いに戦わせてはならない、公衆に見せるためにこれを行った場合は5万円以下の罰金もしくは科料に処す」と定めた条例があるそうです。

それはさておき、喧嘩鳥といわれるしゃもの鍋、幕府や薩摩、長州などの雄藩の間を駆け巡って、明治維新に大活躍した坂本龍馬の好物にふさわしい気がします。

龍馬は、歴史上の人物の中で日本人の一番好きな人物だそうですが、国会議員の間でも一番人気です。今、日本は改革の時代、私も、龍馬にならって、しゃも鍋でも食べて、闘志を高め、国民のための政治活動に邁進してまいりましょう。